響などが述べられている．ツバキは海外でブームをおこしたが，サクラは日本人の思い込みほどには行き渡っていないという．最後は著者らと編集企画者の林　良博，武内和彦両氏による座談会で，本文の内容を敷衍している．本書は現代日本生物誌12巻の一つで，毎巻二つの生物（たとえばカラスとネズミ）をとり上げ，彼らの生きざまを副題の観点から見直すものである．植物関係では「タンポポとカワラノギク」，「マツとシイ」，「イネとスギ」，「ネコとタケ」，「サンゴとマングローブ」，「メダカとヨシ」，「マングースとハルジオン」がある．（金井弘夫）

□大場秀章，望月賢二，坂本一男，武田正倫，佐々木猛智：**東大講座　すしネタの自然史** 284 pp. ￥1,500. 2003. 日本放送出版協会.

独立行政法人となった大学では，社会一般へのアッピールのために，以前にくらべていろいろな行事を行うようになった．学術講座は以前からあったが，本書ではもっとくだけた内容を目ざしている．

5章に分かれていて，1. はすしの歴史と植物関係のネタ，2. が淡水魚と赤身のネタ，3. がその他の魚ネタ，4. が甲殻類とウニやホヤ，5. が貝類など軟体動物に当てられ，それぞれの専門家が蘊蓄を披露している．時節がら，環境や移入生物の問題も各所にちりばめられている．くだけたはなしを目ざしていてもそこは専門家揃いなので，内容はかなり高度なものがあるが，別に通読せねばならないたちの本ではないので，好きなところを拾い読みすれば話のネタをいろいろと仕込むことができるだろう．

一通り見て気付いたのは，ササやハランまで話題にされているのに海苔がとり上げられていないことである．続編として海苔，シャリ，醤油，茶，割り箸はどうだろうか．

（金井弘夫）